

スペイン語母語話者の日本語学習 — [明るい] と [claro] の違い —

西内 沙 恵

1. はじめに

筆者は立教大学大学院の異文化コミュニケーション研究科で日本語教育を専攻しており、認知言語学の知見を生かした日本語の語彙学習教材について研究している。受講生セミナーでは、スペイン語母語話者を念頭に置く筆者の研究について、ラテンアメリカ講座を受講する先輩方から意見をいただきたく発表した。本稿は、発表の概要と質疑応答のやりとりをまとめ、さらにその後の進展を追記するものである。

2. 発表の概要

日本語にはいわゆる同音異義語が多いが、ここでは同音異義語と多義語の区別は論じない。「語」はさまざまな意味を持つという前提から出発する。さて言語Jの含む多義語Pを、言語Sの中に求めたとき、第一義が対応し合う語P'が見つかったとしても、PとP'のすべての語義がぴったり重なり合うケースはあまり期待できない。例えば、日本語の [明るい] とスペイン語の [claro] で考えてみる。第一義が対応する両語、[明るい] と [claro] の、おおまかな意味の重なりをベン図で表わそうと試みた成果が、図1である。

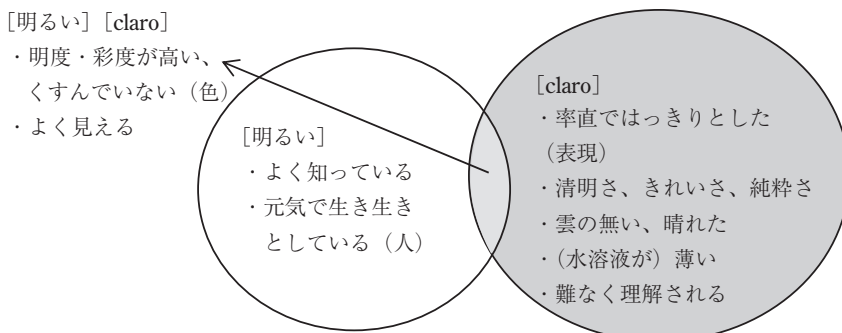


図1 ベン図に見る [明るい] と [claro] の意味の重なり

出典：筆者作成

前述した通り、両言語の間で第一義が対応する語同士であるにもかかわらず、多義のすべての項目が一致するわけではないことが、ベン図から見て取れる。

次に、第一義が一致する語同士の、それぞれの意味派生を階層図に表わしたものが図2である。同じく「明るい」と「claro」を例にとってみる。日本語の意味派生に関しては、今井（2011）を参考にした。今井（2011）は、日本語母語話者を使用者に想定した英語辞典である瀬戸（2007）をもとに、日本語以外の言語を母語とする学習者向けに編纂された日本語辞典である。

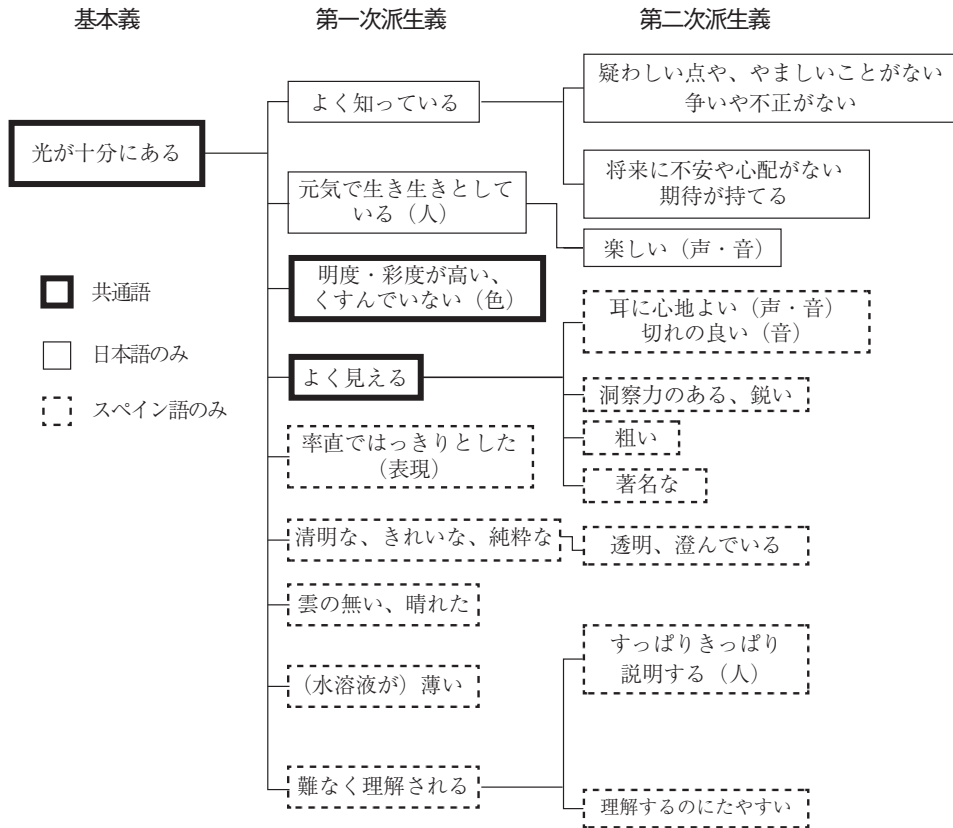


図2 「明るい」と「claro」の意味の階層

出典：今井（2011）を参考に筆者作成

太枠で囲った語義が、日本語とスペイン語に共通する用法。図1のベン図の重なりに対応する。(i) 日本語の「明るい」に特有の意味、(ii) 日本語の「明るい」にはなく、スペイン語の「claro」のみが持つ意味と解釈できる語義を、それぞれ細い実線と点線で囲んで区別している。

日本語Pの語義が、対応するスペイン語P'の意味すべてを包み込む場合や、日本語Pの語義が対応するスペイン語P'の語義を包み込む場合も考えられ、ズレが大きくなるか小さくなるかは、もちろん単語により異なってくる。

ここで、日本語学習における語彙学習および語彙教材の現状について、簡単に触れておく。従来、語彙は経験的に学ばれるもので、学習者の「気づき」や「慣れ」が語義をつかむ鍵と考えられてきた。「様々な語彙学習教材が数多く開発されながらも、多義語を扱った教材は、効果の可能性が高いと考えられる割に、少ない」と山下・岡田（2012: 20）は報告している。一般に語感が良いと言われる、「習得の早い」学習者と、それ以外の学習者との違いの要因は、意味理解の明瞭さだけでなく、当人の性格など学習への適性や、学習方略と呼ばれる、記憶やコミュニケーションのために学習者が用いる対策にあるとも考えられる。そういった方略の中でも本研究では、語彙の習得のために、意味を正確に解釈できる能力の育成に着目した。

図2のような、基本義から派生義へと語義を階層的に示した教材は、すでにいくつか存在している。特に今井（2011）は、筆者が当面、研究の対象とする形容詞に加え、副詞も扱っている。

松本・堀場（2007）ほか、語彙テストの結果を考察したいくつかの先行研究は、語彙の量を測るテストで高い得点を得た学習者が質（意味を明確に捉えているか）を測るテストでも高得点を得たことから、語彙の量と質の間に比較的高い相関が見られたことを報告している。とはいえ、語彙学習というと、語彙の量的側面つまり語彙数を増やすことに焦点が当てられがちである。筆者は、意味の認識を重視する語彙学習教材の有用性を考察することにより、語彙学習の質的側面を補強したい。

一方、言語間の類似点が存在する場合に認められる「正の転移」に着目した研究がある。Kellerman（1977, 1978）は、同語族であり、近い言語であるところの英語とオランダ語における転移の傾向を実験し、報告している。実験では、オランダ語母語話者の英語学習者が、母語での使用法をそのまま英語に転用することを警戒するケースが観察された。具体的には、慣用句に関する容認度テストにおいて、オランダ語から英語への意味類推が容認できないと判断するケースが多く、一方、語の中核の意味により近い用法の容認度テストにおいては、転用への容認度が高かった。上記の実験の結果は、認知心理学の分野から解明されている、言語間の距離とは別に、普遍的な生物学的な思考形式や認知過程の存在が、語義が基本的な意味からの比喩的な拡張プロセスを経て一般化されながら意味拡張を遂げるといった言語の普遍的事実に、学習者が必ずしも追従し、語彙の習得がおこるわけではないことを示唆している。青谷（2008）は、日本語母語話者の英語学習者を対象に、形容詞「重い - heavy」の多義の類推への容認度を調査している。また併せて「重量」「深刻」「不快」という3つの因子を設定し、それぞれの無標性（さまざまな言語の間で典型的だと考えられる特質）と有標性（言語のある特質が、まれで、無標のものより付加的な特徴だと考えられること）を明らかにしている。例えば、荷物が重い（重量）、重い罰（深刻）、気分が重い（不快）といった「重い」を使う表現を、英語でも「heavy」を使って表現できるかどうかを尋ねている。結果は、前述のKellermanの分析を支持するものであった。意味の転用の容認度は、必ずしも実際の意味の対応と一致しなかった。

これらの先行研究から、語義の無標性と有標性の違いによって、学習者が意味の類推を避ける度合いが異なることが明らかとなった。学習者は、母語と目標言語の間によく似た特徴が実際にあるからといって、必ずしも転用するわけではない。転用を容認しない心理的背景から、図2の太枠で示したような日本語とスペイン語に共通する意味であっても、産出される可能性も

低いだろうと推測される。本研究を通じ、学習者にとって、母語の有標な特徴であっても目標言語も有することがある、ということへの確認となることが期待される。確認により実際の産出への試み、ゆくゆくは意味の獲得につながるだろう¹。

以上、先行研究を参照して、本研究の持ち得る意義を考えてきた。さらに将来的な目標として、次のことを考えている。まず、認知言語学の応用への可能性を探ること。次に、日本語教育のさらなる前進に向けて、英語以外の言語に対応する教材の普及に貢献することである。英語を介さないことで、非英語母語話者による重訳、またそれに伴う誤解を避けることができる。筆者が構想する教材は、今井（2011）の成果にスペイン語母語話者向けの、スペイン語の意味記述を組み合わせるものである。英語以外を母語とする学習者に、日本語語彙学習の道を一気に開く、前例の乏しい教材を創出する。

では、意味派生の階層図を教材として用いることの狙いは何か。まず、階層図やベン図を使って意味の広がり进行を提示することで、学習者の視覚に訴えることができ、語義の異同をより実感しやすくなる点である。また、基本義から階層的に意味の派生を示すことで、母語に欠けている派生義への順当な理解につながることを期待される点である。以下に示す例はそれぞれ、図2、つまり「明るい」と「claro」の例とは異なる例における語義の重なり具合を示している。

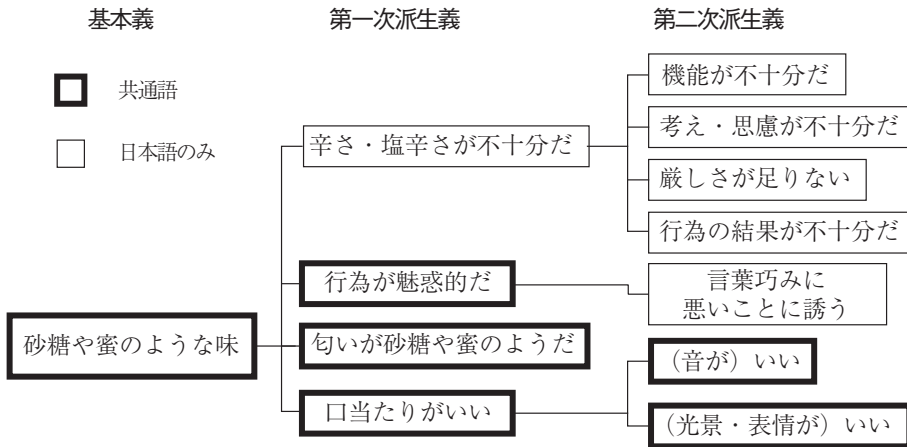


図3 「甘い」と「dulce」の意味の階層
出典：今井（2011）をもとに筆者作成

図3から、第二次派生義まで分析すると「甘い」に特有の意味がいくつかあることが一見するだけで分かる。「明るい」と「claro」の場合（図1）と違い、「dulce」は「甘い」の真部分集合となっている。細い実線で囲まれた例は「dulce」の用法からは類推しづらく、日本語学習者にとって、習得に結びつきにくい語義と考えられる。再び、Kellermanや青谷らの研究結果を振り返れば、太い実線で囲まれている意味であっても、習得が容易であるとは必ずしも言えない。基本義としたところが無標の意味であろうと想像できる。一方で第二次派生義は、話者の認知的側面が、

意味の拡張の過程で色濃く反映されているため、有標である可能性が高いと考えられる。

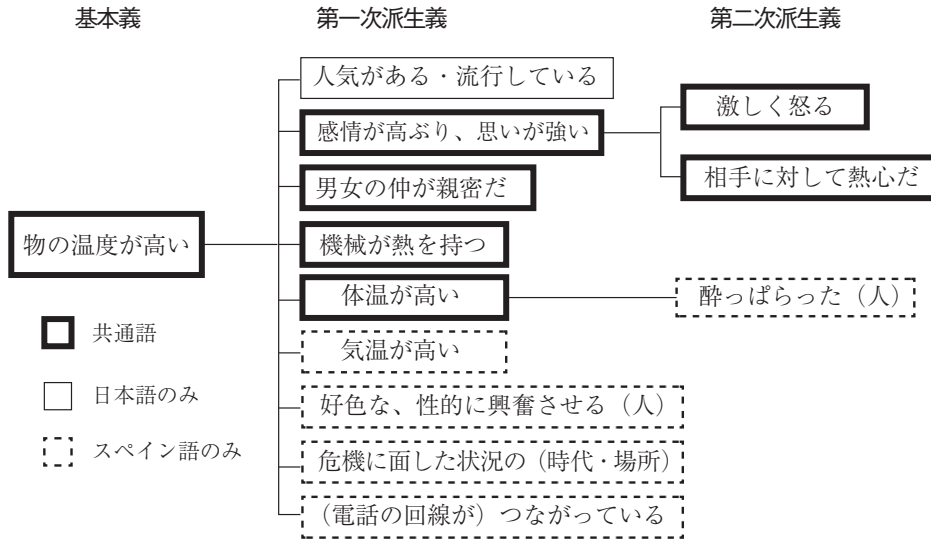


図4 「熱い」と「caliente」の意味の階層

出典：今井(2011)をもとに筆者作成

「dulce」と「甘い」の対応に対して、図4に挙げた「熱い」と「caliente」の対応では、「caliente」の意味範囲は「熱い」よりも広いことが見て取れる。ベン図に置き換えて考えると、スペイン語が日本語を包み込んでいる型に対応する。この場合、日本語の「熱い」が持たない「caliente」の意味、図では点線に囲まれた語義を日本語に応用した結果、「変な日本語」を話したり、意図せざる意味が伝わってしまったりする可能性がある。

目下のところ、スペイン語母語話者に日本語を教えた経験が筆者にはまだないため、意味のズレから生まれるであろう誤用の例そのものも筆者の机上の想像に過ぎない。修士1年次末までには教材見本を作成し、修士論文作成に備え、試用調査を実施する予定である。

3. 質疑応答時のご意見

幸い多くの激励のことばが寄せられた。紙数に限りがあるため、3点のみを紹介する。

・スペイン語の通時的な縦の軸と、共時的な横の軸、両方に気を配らなければならない仕事になるだろう。例えば、横の軸とはスペイン語圏の地域差、縦の軸には、日本語で言うところの「やばい」など、時間軸による意味の変遷が挙げられる。

→ (返答) 現代語の語彙教材として、新しい意味も載せたい。また、修論では横軸における差異、つまり地域差の目立たない形容詞を扱うが、差異の目立ちやすい動詞や名詞、日本語との比較自体の難解なsaberとconocerのような動詞例に対しても、いっそう注意を払いたい。

・日本語の実際の運用においてよく耳にする、語に持たせる曖昧な意味合いやニュアンスといっ

たものも、意味の理解において厄介であると予測される。

→ (返答) 実際の言語の使用場面では、暗示を含む用法や、対話者同士ないし特定のグループ内だけに伝わる特別な意味を語に持たせることも確かに多い。そういった用法は、関連語との比較によって違いとして抽出される「言語体系内の意味」「辞書的な意味」とも、語が指し示す対象と関連を持つ様々な事柄を持つ「百科事典的意味」とも異なるものなので、教材に意味として数え上げだすときりがないため、一線を引いて対処しようと考えている。ただ、暗示表現や言葉遊び、紋切り型の例を、コラムなどを設け、別枠で解説を試みたい。

・スペイン語母語話者は、ある日本語語彙の意味を知りたいと思ったとき、目下どういったツールを使って調べているのか。

→この問いに対しては筆者に代わり、会場におられたスペイン語母語話者2名にお答えいただいた。お一人は日本語-スペイン語ネット辞書CLAVE、もうお一人は、日本語から直接スペイン語へ橋渡しする方法ではなく、日本語-英語翻訳のアプリケーションrikaichanを活用しているとのことである。

〈註〉

1 6月の発表では触れていない。その後、本研究の意義を説明する要因としてレビューした。

〈参考文献〉

青谷法子 (2008) 「「計量」形容詞対における言語転移容認度の比較研究: 「重い-軽い」を対象として」『東海学園大学研究紀要』第13号, pp.3-14.

今井新悟編著 (2011) 『日本語多義語学習事典: 形容詞・副詞編』アルク

瀬戸賢一 (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』小学館

松本順子・堀場裕紀江 (2007) 「日本語学習者の語彙知識の広さと深さ: 中国語母語話者と日本語母語話者の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』第10号, pp.10-27.

山下喜代・岡田純子 (2012) 「日本語の語彙学習: 教材分析と意図的学習のための指導案」『青山語文』第42号, pp.16-29.

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版

Kellerman, E. (1977) "Towards a Characterization of the Strategy of Transfer in Second Language Learning." *Interlanguage Studies Bulletin* volumen 2, Number 1. pp.53-145.

— (1978) "Transfer and Non-Transfer: Where We Are Now." *Studies in Second Language Acquisition* 2. pp.35-57.

〈参考URL〉

「多言語辞書チュウ太」 <http://chuta.jp> (2013/6/25 アクセス)

「rikaichan」 <http://www.polarcloud.com/rikaichan/> (2013/07/15 アクセス)

(にしうち さえ 本講座受講生、本学異文化コミュニケーション研究科
言語科学専攻博士課程前期課程在籍)